

博報財団 第 9 回「国際日本研究フェロシップ」成果報告書

I. 研究概要

※定型フォーマット有 (A41~2 枚)

※全て日本語で作成

氏名 (在住国名)	KOLUKISA, ALI AYCAN (TURKEY) (トルコ共和国)
所属	Nevsehir Haci Bektas Veli University
招聘回 (招聘研究期間)	第 9 回 (2014 年 9 月 01 日~2015 年 8 月 31 日)
受入機関	Waseda University – GSJAL (早稲田大学・日本語教育研究科・外国人研究員)
招聘研究テーマ	レキシコグラフィの言語学的研究
研究目的	本研究は METALEXICOGRAPHY に属する研究であり、主な目的はより効率的で学習者が分かりやすい辞書の開発できるように、レキシコグラフィの理論に基づきバイリンガル辞書のための新しい方法を構築することである。

研究概要：

投野 (2006 : 7) は、学習辞典は大別すると、目標言語の母語話者が作成する 1 言語辞書 (Monolingual Dictionary) と、外国語として学ぶ側が作る 2 言語辞書 (Bilingual Dictionary) の 2 種類があると述べている。要するに、投野 (2006) によれば、学習辞書を二つに分けることが可能であり、先ず一つは第二言語として習得される目標の言語で見出し語があり尚且つ、その見出し語に関する定義およびその他の周辺的な情報の全てもまた習得目標の言語で説明されるものと、見出し語が習得される言語であるが定義や説明などが学習者の母語、或いは学習者の理解がより深い言語で行われるものといえる。

しかしながら、日本語の場合には英語の「Learner's Dictionary」のような学習辞書が存在しない。これは、Hornby たちの研究の重要性が日本国内の教育の先駆者によりよく理解されなかったという面もあるのではないかと考えられているかもしれない。一方、約 100 年前ほど日本で開発された Hornby たちの研究の成果が現在第 8 版が出た「Oxford Advanced Learner's Dictionary」と共にまだまだ有効性を保っている。

では、日本に学習辞書が本当に存在しないだろうか。これは、和英・英和学習辞典のお話なら、何冊もあると言うべきであるが、話が和和の一言語学習辞書ならば、ちゃんとしていると言えるものは残念ながらまだまだ存在しない。これは、2014 年 12 月 07 日に筑波大学で行われた「日本語学習辞書開発の支援を考える(KAKEN :23242026)」というタイトルの研究会からも明らかである。しかし、砂川先生のチームの努力がいよいよ実るのではないとも考えられている。一方、同じ研究会でコメントを下さった石川慎一郎氏の「日本はイギリスや米国など欧米の国々に比べ、辞書学が 20 年とも遅れている」という発言から言えば、今までに日本国内で行われてきている辞書学の研究に何か足りないところがあるのではないかということも疑われるであろう。そこで、海外からの研究者の目で言えば、日本の辞書学は実践的な場面で非常に優れてはいるが、理論的な研究が欧米などに比べ非常に少なく遅れている。これは、理論的な土台を必ずしも必要としている学習辞書の開発の遅れからも理解されるであろう。

そこで、学習者のためのよりよい学習辞書の開発を目指している本研究は、レキシコグラフィの理論を検討してから、その他の学際的分野の理論および方法を考察することに決めた。そこで、特に理論的辞書学の研究で発達している欧米のレキシコグラフィ関連の学際的分野を検討し、3 年間を超える教師としての経験を活かし、学習者の日本語の語彙習得の際、ミスを起こしやすいところを配慮しながら、新しいタイプのバイリンガル辞書の開発を試みた。その結果、バイリンガル辞書における定義の仕方にもう一つの基準を設けることに辿り着き、その結果として出来上がった新しい方法をバイリンガル辞書にどうやって取り入れる

ことができるかと考え始めた。

研究を行っている最中に、小宮ゼミで聞いたある発表内容が閃きのきっかけとなった。それで、研究報告会 I で説明した Pavlenko (2009) のバイリンガル・モデル MHM に沿って自分の理論を説明することができるようになった。しかし、後ほど受入機関の小宮先生のご指摘を受け、本論をより具体化させ教育に適した説明を設ける必要があると分かった。それで、先生のご指導に従い教育により近い基準で論じることに成功し、その内容を三省堂主催により行われる「語彙辞書研究会」の「第 47 回研究発表会」で先生の方々に発表することができた。それは、第二言語習得論における肯定証拠と否定証拠に基づく説明の仕方であった。

その後、Asialex2015 の発表大会で、日本 CASIO の電子辞書開発部からいらっしゃるある方が私の研究内容に興味を持って頂いた結果、日本へ戻ってから研究内およびトルコの電子辞書現状についてお話しできるよう、CASIO 本部の電子辞書開発部から招待を受けた。それで、CASIO の技術者とも議論できる機会を得た。よって、本研究の成果は一般企業からも注目を集めることができたといえる。なお、以下は CASIO 本部で行ったブレイン・ストーミングの一部である。

• beau·ti·ful /bjú:tʃəl/ /bjú:tʃəl/

• ▶ a 美しい, きれいな; りっぱな; 上流の, 上品な, 優雅な; [° <int>]
《口》 みごと(な), あざやかな, すてき(な); とても楽しい。

beautiful = きれい (kirei)

▶ 頭の中: 「彼女はきれいです」 ⇒ She is beautiful.

▶ 頭の中: 「きれいな服を作りたい」 ⇒ I want to make beautiful dresses.

▶ 頭の中: 「この服を直しきれいにしたい」

⇒ I want to mend this dress and make it beautiful.

▶ 頭の中: 「このトイレをきれいにしたい」

⇒ I want to make this toilet beautiful.

(8月6日: CASIO 本社・電子辞書開発部からのご依頼により特別に発表された内容に基づくものである)

beautiful = きれい (kirei)

▶ 「このトイレをきれいにしたい」

⇒ I want to make this toilet beautiful.

一方、英語で「beautiful toilet」という言い方も可能ですが、その場合の「beautiful」は日本語の「清潔」または「クリーン」という意味ではない。

では、このような問題はなぜ起こるのか？

- ▶ 先ず、言葉の多義的な意味、いわゆる「polysemy」はどうやって誕生するかを考えてみよう。
- ▶ 多義の意味はことばの運用により発生し、時間と共にその運用が固定した結果、多義の意味が定着する。要するに、多義の意味は辞書に入る前の段階です。
- ▶ その多義の意味が多くの話者の間で定着してから、辞書に現れるようにです。
- ▶ それで文脈を提示しなくても、使用されるコーパスで確認を行い、言葉の意味を説明できる。
- ▶ これは、一言語辞書の場合にはうまく行くものだが、バイリンガル辞書の場合、少し異なる。

(8月6日: CASIO 本社・電子辞書開発部からのご依頼により特別に発表された内容に基づくものである)

《参考文献》

投野由紀夫 2006 「Learner's Dictionary」『日本語学』Vol.25, No.8, pp. 6-20, 東京: 明治書院。

Pavlenko, Aneta. 2009. Conceptual Representation in the Bilingual Lexicon and Second Language Vocabulary Learning. In *The Bilingual Mental Lexicon Interdisciplinary Approaches*, ed. Aneta Pavlenko, 125-160. UK, US and Canada: Multilingual Matters (amazon kindle version).

展望: 理論をより具体化させ、教育により基準に基準で説明できるようになりたい。

先ず、ここで CASIO の辞書開発部で行った面会で使用された内容をご覧いただきたい。一方、ご覧の例文は正式的に行われた研究発表によるものではなく、単なる本論文の著者の希望に基づき聴衆者の理解を深める目的で作られたものである。

ここで、先ず考えて頂きたい幾つかのことがある。先ず、上の最後の二つの例文をご覧いただきたい。「きれいにしたい」という内容は最後の 2 つの例の場合も日本語で同じ表現できるものであるのに対し、なぜ最初の例文が通じるが、最後の方は通じないだろうか。この質問への答えは以下の通りである。